一

新島襄は生涯に五十首程の和歌を遺しているが、その中で最も有名なものとして、亡くなる直前に大磯で詠んだ、

いしかねも透れかしてひと筋に射る矢にこむる ますらお 大丈夫の意地
をあげることが出来る（軸装された複製が収益事業課で販売されている）（1）。しかも興味深いことに、この歌には自作・添削という二つのバージョンが存している。

前にあげた歌の形が襄の自作である。襄は妻八重に手紙を出し、歌人・池袋清風に自作の添削を依頼している。さすがに清風は即座に、

岩かねも透れと放つますら雄の心の矢さき神のまにまに
と添削して返した。襄が「射る矢にこむる大丈夫の意地」と直情的であるのに対して、清風は「心の矢さき神のまにまに」と穏やかな表現に改めている。

この件については、襄の日記（漫遊記事）に、

廿三年之春を迎へて

一月五日

○石かねも透れかしてひとすじに射る矢にこむるますら雄の意地

（『新島襄全集』408頁）

と記されているので、この歌が新年の決意を詠じたものであることは間違いない。添削である。もちろん明治二十三年といえば、襄が亡くなる直前のことである。

しかしながら日記には、清風に添削を依頼したことなどは一切記されていない。添削の経緯は、依頼された清風自身が、後に「新島襄先生の和歌」（国民之友108・明治二四年二月）の中で触れていることによつてようやくわかるのである。参考までにその部分を引用しておこう。

昨年一月九日、予同志社図書館に在り。偶新島夫人来て曰く、襄より手紙来り、貴位に歌を直して戴き度云々、予に示せり。即ち見るに初めに、

廿三年の春を迎へ我がこゝろざす所を

とありて、歌一首を書き、其次に左の文あり。

右は歌道を少しもこゝろかけぬものゝ吐きし歌なれば何とか歌になり候様池袋清風大人に御頼み被下度候

一月五日

襄

八重さま

池袋様には御直し被下候は、早々御戻し被下度候

右即座に斧正^{ふせい}して渡す。左の如し。

岩かねも透れと放つますら雄の心の矢さき神のまにまに

(30頁)

「斧正」とは和歌などを添削することである。この一件については、既に河野仁昭氏が「近代化過程における伝統文学―池袋清風の英学と和歌―」(人文科学10・昭和五四年十二月)の中で紹介されているが、それを詳細に検討されたのは本井康博氏の「新島襄の「白鳥の歌」―「いしかねも」秘話―」(新島研究30・平成十一年二月)であった。

本井氏は「いしかねも」の歌を襄の最後のメッセージととらえ、歌の改作を含めて、その歌を贈られた人々と襄との関係を推理作家のように探っていく中で、まさに「いしかねも」歌に込められた襄の思念(遺志)を読み取っておられる。ここまで深く論じられているのであるから、もはや付け加えることなどほとんどないのだが、古典和歌文学専攻の立場からあえて二点だけ私見を提示してみたい(2)。

二

まず第一点は、歌の背景(典拠)についてである。本井氏は御論の中で、「あるいは那須の与一のお話が想定されてはいないだろうか」(235頁)と述べておられる。これは余談風に記されているものなので、取り立てて異義を申し立てる必要もないのだが、一応私見を述べておこう。確かに「矢」からの連想で、弓の名手たる那須与一が登場してもおかしくはないのだが、それ以外のかかわりが希薄ではないだろうか。

それよりも「矢」があって「石」を「射る」とあれば、即座に「石に立つ矢」あるいは「射石飲羽」という中国の故事が思い浮かぶ。それは石を虎と誤認し、一心に射たところ、矢が羽のところまで石にささったという有名な話である。その出典は『韓詩外伝』の熊渠子^{ゆうきよし}、『呂氏春秋』の養由、『史記』の李廣と三つの可能性があるのだが、そのうちのどれであるかを特定することはできそうもない。しかしながら襄は、この有名な故事を念頭に置いていたのではないだろうか。

それとは別に、「いしかね」という初句の表現・表記も少々気になる。これが日記にあるように「石かね」だったら、「いわかね」と読むこともできる(「石」は「いわ」とも読む)。もしそうなら、この部分は必ずしも添削されたのではなく、単に「石」という表記を「岩」と改めただけということになる。この点は従来ほとんど看過されてきたようで、その表記は統一されていない。しかし決定版とも言うべき襄の自筆では「いしかね」とひらがな表記になっているので、残念ながらこの説は成り立たないことになる。

では「いしかね」は「石金」であろうか。もしそうなら、「石金」は「石」と「金」、つまり共に硬いものたよとなる(「木石」や「石部金吉」も同様)。ところが「石金」は、古典においては歌語として全く熟していない言葉(非歌語)であった。桂園派の歌人だった清風は、おそらくそのことがすぐにわかったに違いない。そこで直ちに「石金」を、似

て非なる「岩が根」に添削したのであろう。「石金」は「石」と「金」であるが、「岩が根」は一語で大岩のことを意味するのであるから、これによって「金」の意味は完全に消失してしまう。しかも「岩が根」（「岩根」に同じ）の方は歴とした歌語であり、『万葉集』にも、
岩が根のごごしき山を越えかねて音には泣くとも色に出でめやも（三〇一番）
と歌われている。

ところが面白いことに、小崎弘道はこの清風が添削した歌について、

曾つて先生の人に贈られた歌に「岩金もとほれとはなつ武夫の心の矢先神のまにまに」と云ふことを詠まれました。此歌は先生が友人に贈られた歌であります。是は誠に先生の心事を能く現したる所の歌と思ます。

（デビス著・山本美越乃訳『新島襄先生伝』354頁）

と述べている。これについて本井氏は、「池袋が朱を入れた作品の方であることを知っての論評であったであろうか」（250頁）と疑問を投げかけておられる。

その真偽は不明であるが、伝道師としての弘道の立場を重視すれば、キリスト教精神の発露されている添削歌の方が評価されて当然であろう。それよりもここでは、「岩金」と表記されていることの方が気になる。せつかく添削した「岩が根」を「岩金」と表記したら、また「岩」と「金」になって「石金」と同じ意味に戻ってしまいかねないからである。しかも「岩金」という表現は、「石金」以上に和歌では熟していない。これは単なるあて字であろうか。それとも弘道は和歌的素養に欠けていたと解すべきであろうか。

いずれにせよ清風が「石金」を「岩が根」に添削したことにより、漢語的な無骨な表現が、和語的な柔らかい表現に改変されたわけである（ただし用法的に適合しているとは言えそうもない）。そのことは添削された歌を見た襄自身が、

池袋様より御正し被下候分は逐而気分のむきたる時に半切に大書す可く候間、若し池袋様に御逢ひ被成候はば、右之趣も御話し宜しく厚く御礼申上、荒々しき歌をも大分優美なる風調に相成申呉々も難有奉存候、私の歌はあらごなしの出来ぬあばれ馬の如し、此は少しく関東武士の如き風なりと申して可ならん。（『新島襄全集4』333頁）
と八重宛の一月十日付け書簡に記していることによっても明らかであった（『新島襄先生の和歌』にも同様の記事がある）（3）。

三

ところで、「石かね」歌が詠まれたのが明治二十三年の正月五日、それが八重の元に送られ、九日に清風が即座に添削して返した。そこまでは問題ない。しかしその翌日の十日の八重宛の裏の手紙に、清風の添削に対する感謝の意がしたためられているというのは、現在の郵便事情からしても時間的に早すぎるような気がする（速達でも無理）。その後すぐに誰かが返事を届けたのであろうか。あるいは「九日」というのは「七日」の誤りではない

だろうか。それはさておき、裏が自らの歌を「関東武士の如き風」と称していることについて、もう少しこだわってみたい。

たまたま池袋清風の書いた「和歌の略史（続）」（郵便報知新聞・明治二十一年八月二十五日）を読んでいたところ、

維新の際、尊攘の浪士未だ和歌を知らざる者口から出放題に吐きたるを集めて興風集とか称け、詩歌共に載せたるを見しことあり。是等は歌と言ふにはあらず。

岩かねも砕けさらめやものゝふの君が為とておもひ切る太刀

（『明治大正短歌資料大成Ⅰ』213頁）

という記述が見つかった。ここに引用されている浪士の歌（4）も初句が「岩かね」とあり、内容も裏の歌と類似していることに気づく。もちろんそれ以外の用語は、浪士の歌が「砕け・ものゝふ・太刀」であるのに対して、裏の歌は「透れ・ますら雄・矢」となっており、両歌を一律に扱うことはできないのだが、少なくともこの類似から、裏の歌にも武士道的な発想を認めることはできるはずである。

清風は裏の歌を添削する以前に、この浪士の歌を批判的に論じているのであるから、八重を介して裏の歌を見せられた時、そこに尊皇の志士的なものを即座に看取した可能性は十分に存する。しかも浪士に対する「未だ和歌を知らざる者口から出放題に吐きたる」という評は、添削を乞うた裏の「歌道を少しもこゝろかけぬものゝ吐きし歌」という謙辞と奇しくも符号しているのである。これなど裏が清風の文章を読んでいたとも、清風の作為とも考えられる。

なお清風は、裏の歌を添削したついでに、

梓弓神にまかせて放つ矢のつらぬかね世はあらじとぞ思ふ

というある人の歌を返歌風に添えている（「新島襄先生の和歌」）。また清風は八重に対して、

先生は時に歌など半切に大書し給ひし事ありやと問ふに曰く、否一回もあらざりし。

如何なる都合にて歌など書く気になりしや知らずと。

という質問をしている（同）。半切に大書したことが今までなかったとすれば、「石かね」歌に込められた裏の思念・意欲は相当なものだったことになる。清風がその裏の思いをどれほど理解していたかはわからないが、まさかこの後すぐに亡くなるとは思ってもいなかっただろう。

キリスト教精神に感化され、日本にキリスト教を広めるためにその身を捧げた裏であるが、その最後（辞世に近い）の歌には「関東武士の如き風」の直情が吐露されていた。そこにキリスト教精神が看取されるか否かは別として、清風は添削に際して、ことさら「神」という言葉を挿入している（5）。本来ならば裏の方が清風を宗教的に指導して当然なのであるが、ここではむしろ清風の方が裏にキリスト教精神を喚起させていると言えるのではないだろうか。

ついでながら「ますらお」の漢字表記は、「丈夫」あるいは「大夫」で十分であって、「大

丈夫」というのはやや大げさである。弘道の「武夫」など、下手をすると「もののふ」と読まれかねないものである。裏の意識としては、むしろ「武士（もののふ）」の方が適合しているかもしれないのだが。

四

二種類の「いしかね」歌がその後どうなったかという点、裏は添削される前の形が気に入っていたようで、その形で三枚大書して八重に送っている。それ以外に広津友信及び京都府知事・北垣国道宛書簡にもその形で書いて贈っている。

それに対して、先の小崎弘道及び青柳新米と時岡恵吉の二人の書簡には、清風が添削した形の和歌で書かれている。微妙に異なる歌が二種類伝わっているのは、こういった裏の事情があったからである。

なお、八重宛に三枚送られた書については、十日付けの書簡に、

十四日に彼之三四人御招き之義は大出来と存じ大に喜び申候。彼之人々を驚かさん為
に新年之和歌を大文字に認め、其々に札を付けさし上候間、お前様へさし上候分は決
して他に御譲りなく、往々は表具なしをき被下度候。別に一枚は内々横田に御渡し被
下、又一枚はかの人々が所望ならばくじになし、当りし者に御渡し被下度候。もし横
田氏に当らば何とか申分を立、他之三人之内に御譲りの方よろしかるべし。

（『新島襄全集4』332頁）

とあって、十四日に裏の誕生日を祝う会が自邸で催される予定だったことがわかった。こ
れは八重を寂しがらせないうために、裏が画策したものだ。そのことは裏が横田 安止やすただ
に宛てた十二月三十日の手紙に、「私の留守にして淋しき妻之心をば慰め被下度候」（306頁）
とあることによってわかる。

この八重宛の手紙によって、三枚の内一枚は八重の分、一枚は横田の分、もう一枚は鬮
引き用と、最初から予定されていたことがわかった。裏は横田をかなりひいきしているの
ではないだろうか。

果たして当日の顛末はというと、鬮を引き当てて喜んだ古賀 快象（鶴次郎）が次のよ
うに回想している。

或正月に浜田君、波多野君、横田君等と私四人雑煮客に招かれたる時、食後奥様は一
幅の書をお見せなされて「之は裏の述懐ですが、唯の一枚だから鬮引にして差上げま
す」と申されました。「鬮なら私です。負けっこなしです」と御出しになったコヨリを
ひくと案の定私がひきあてました。浜田曰く、「古賀が又吹きあてたな」と、此時私は
実に愉快でした。飛び立つ程でした。寄宿舍にて来り観る者皆羨望相でした、「いはか
ねも透ふれ」云々のものです。
（『追悼集VI』396頁）

しかし八重は裏の意を汲んでか、横田安止に最初から渡す分があったというカラクリを、
最後まで誰にも明かさなかった。今までこの一件は裏の伝記でのみ紹介されるだけだった

が、実は八重も深く関わっていたのだ（共犯者）。

余談だが、八重の手元に残った書は、襄の二十年忌の記念に石版で複製され、関係者に寄贈されたらしい。おそらくその一つが、風間久彦（京都会津会学生会員）にも贈られたようだ。というのも久彦宛八重書簡に、

此すり物は亡夫にく（肉）筆ヲ先年石ばんすりにいたしましたしものを一葉しん上致します。

御笑納被下度ふる物に候らへども同志社時報差上候。御覽被下度。引つゞき後もさしあげます。先は御伺ひまで。あら／＼かしこ

十二月四日

八重子

風間先生

とあるからである。なお久彦宛八重書簡は、現在風間健氏が大切に所蔵されている。

結

以上、「いしかね」歌をめぐる、二章ではその出典が中国の故事にあるのではないかということ、及び「石金」と「岩が根」の表記や意味の違いについて論じた。続く三章では襄の武士道精神発露と、清風の添削のポイントが和歌らしさのみならず、キリスト教の「神」の重視にあるという私見を述べてみた。

襄の精神は、歌の世界もしくは死の直前において、必ずしもキリスト教ではなく、アメリカ出国以前の武士の魂が発露されていたと考えられる。それが病によるものなのか、それとも襄の本音が吐露したものなのかはわからない。あるいは同志社大学設立への情念の発露であろうか。少なくとも襄の生涯を考える上で、歌というものが非常に重要であることは間違いないさそうである。

この歌の評価に関しては、あまりにも直情的で必ずしもすぐれているとは言いがたい。しかしその後には襄が亡くなったことで、この歌には特別な付加価値が与えられた。つまりその直情は、自らの命を賭してまで同志社大学設立に奔走した襄の情熱、同志社大学の原点として再評価されているのである。そうなると、清風の添削など問題にもされなくなってしまう。

余談であるが、大正四年に末吉勘四郎によって刊行された『明治百人一首』の中に、清風の弟子の一人である大西祝の歌が収録されている。それは、

ひとすじにおもひいるやのやさきにはかたしと見ゆるものなかりけり

という歌である。これは明治二十二年までに詠まれた歌となっているので、あるいは新島襄の歌に影響を与えているかもしれない。「いしかね」歌に関しては、こういった類型を含めて、もう少し考察を深めた方がよさそうである。

(1) この歌と対にされているのが「庭上之一寒梅」詩である。これも死の直前に作られたとされているが、明確な日付は不明のようである。もともとこの詩は「真理似寒梅 敢侵風雪開」を踏まえたものと考えられている。しかしながら「敢」が「笑」に推敲されている点、直情的な「いしかね」歌が読まれた五日よりもずつと後、清風の添削よりも「関東武士の如き風」を良しとした十日よりも後であろう。つまり「庭上之一寒梅」には、既に死を覚悟した襄の境地が表れていると思われるからである。

(2) 襄はこれ以前にも清風に添削を乞うたことがあったのだろうか。もしこれが唯一の例であれば、襄自身この歌のできばえに多少自信を持っていたのかもしれない。一方の清風にしても、襄から添削を乞われたのであるから、決して悪い気はしなかったであろう。それどころか八重に質問していることから察するに、自分が添削した歌を襄が揮毫することを密かに期待していたとも考えられる。ましてそのことをわざわざ書き残しているのであるから、この添削は清風にとって名誉なことだったのであろう。

(3) 文面では清風の添削に慇懃に礼を述べているものの、それをすぐに半切に揮毫するつもりはなかったらしい。深読みすれば、襄は清風の添削に納得していなかったとも読める。

(4) 清風はこの歌の作者を明示していないけれども、『愛国百人一首』に青村次左衛門の歌として「岩が根も砕けざらめや武士の国の為にと思ひ切る太刀」と出ていた。「君が為とて」と「国の為にと」の異同があるが、同じ歌と見てまず間違いあるまい。この青村次左衛門は薩摩藩士で、桜田門外の変で井伊大老を暗殺した一味の一人である。桂園派の清風が腰折れと批判した歌が、後に『愛国百人一首』に撰入されるのであるから皮肉なものである。

(5) 「神のまにまに」という表現からは、『百人一首』の菅家(菅原道真)の「このたびは」歌が想起される。ただし「神のまにまに」は既に『万葉集』に見られる表現であって、決して道真の独自表現ではなかった。またその後も流行した事実認められない。

〈参考文献〉

- ・池袋清風「新島襄先生の和歌」国民之友108・明治二四年二月
- ・河野仁昭「近代化過程における伝統文学―池袋清風の英学と和歌―」人文科学10・昭和五四年十二月
- ・本井康博「新島襄の「白鳥の歌」―「いしかねも」秘話―」新島研究30・平成十一年二月
- ・吉海直人「新島襄の「いしかねも」歌雑考」同志社女子大学総合文化研究所紀要18・平成十三年三月